

拍手の音で振り返ると、金ピカの軍人が二十人ほどハラシヨ、ハラシヨと言っている。通訳がきて、名前などを聞かれる。帽子をだせという。パピロスなど一つの帽子でははいりきれない。仲間の帽子もかりる。あとで皆さんで分配す。

また心配が出来る。ハラシヨラボータでまた帰りがおくれるのではと。五人で心配をしたが、それから一週間ほどで迎えの船が本国よりきた。無事に乗船できた。

ダモイだ、ダモイだとだまされながら、山での労働、みんなが休んでいるときの電気の仕事、舞鶴が朝もやの中に浮かんだとき、生きて帰れたと戦友とだきあって涙した。

朔北の苦闘シベリアにて

新潟県 若井 正七郎

昭和二十年八月十五日、ふりかえって思いだす日であり、かつての千島は当時、松輪島松原隊に所属して、単

純に国のためというが、心身ともおとろえを見せた軍人として、終戦をかんちしたのが十九日ごろか、二十二日ごろなのか、ソ連の来島により、経験したことのない武装解除と、何が何だかさっぱり不明、これからの人生のへんせつというが、日本に帰れるという。いいふらしで二十六日ごろ。とにかく船にのり、一日二食くらいでそれも少量で。

船は南へいくかと思えば、その船は、海を知っておると思われる、北海道附近を通ると思われる、職業を漁師とする人達の話では、北へ動いておるらしいとのこと。幾晩星を眺め、これからの進路、又は近き人生の将来もわからぬまま、ついた港が、通称「ソフガワニ」らしい。(コムソモリスク州)

船よりおりて汽車に乗る。やはりこおりついた貨車、床は冷たい。窓はあけることがよういではない。少しこわれている。歩哨兵(カンシ)らしい。ダワイ(歩け)、ダワイ、ダワイである。幾百キロ、幾日乗ったのだろうか。結局、伐採作業を労働とする収容所である。一応軍隊の規律的なものをささえに、上官のいわゆるソ連より

の指示による中継の命令、号令である。

まもなく将校はいなくなつた。下士官たぐいのグループが一応労働の長となり、一ラポータ単位の班がいくつか作られた。地図は不明確、磁石はとりあげられる、時計もいつしかタバコ又はわずかなパンひと切れに変わる。食べるのが精一ぱい。そろそろ下痢患者が出始めた。想像を絶する寒さ。現役当時、旧満洲におつて、此の地を監視しておつたことを、なにはともかく想いだす。

仕事はなれない、人間関係はだんだんおかしくなる。

まず言葉が通じない。水が思うように飲めない。悪条件がどんどんでてる。頭もなんとはなしに整理もつかず、身体が弱くなるため、病院「オッペ」患者もだいでてくる。まず感じたことは、ビタミン剤の不足、続いて労働に対する食事の量、パンが規制すけられたことである。困惑は労働のきまりなのか、一食のパンのため、少しくらい質をごまかしてもと思うほど。量的な労働の成果をあげなければならない。

冬の伐採はまったく大変である。寒さで倒れる者、積

みこみでケガをする者、ラポータ（汽車の薪割）又は機関車の薪（燃料にする）の積みこみで、夜間行方がはつきりしない者等々で、人間の掌握もままならない。ときたま鉄道の線路を使って、トロッコで汽車の合間を見て、なんらかの道のりを木材の運搬作業を実施したときである。

ハラシヨラポータ班には監視が一応ゆるく、自主的になつた。あとでわかつたことであるが、トロッコの前方と後方に赤旗「布切れでも可」を持って、汽車の監視をしなければならぬことになっておるらしい。それを知らず、又は一人でも労働量と食事量の比率から、前方に一人しかたさず、一人分の労働分として、木を切るほうに加担した。午後になり調子もよく、一時ごろであろうか、とつじよ上級の軍人の監視が二人きて、早速トロッコのストップを命じる。スワツと思つて要領良くしたつもりだが、すべてどうさが後手後手になり、規律違反で、手ぶり、足ぶりで弁解はしたが、何といつても言葉がはつきりしない。相手にこちらの意思が通じない。汽車の時間との関連もあるようで、だんだんあたりが暗

くなる。人間を集めるトロッコははずせと。

さあ、てんやわんやである。私が長である。長とその後
の指揮者は即刻事務所に来い。後の者はアブナくない
よう、時間まで木を切れ、である。事務所といつてもそ
まつな物だ。昔の野戦の建物（幕舎）の上品なようなも
の。寒い寒い、お湯が一パイもない。サア、理由を言
なさい、である。お前はソ連国法をおかした罪人である
かのようなことである。向こうの立場でいえば正統
で、私から思えば罪をさせられ、胸を、又は頭をうち抜
くような手ぶり足ぶりである。もう私等は身の毛もよだ
つ心境で、まさにこれでおしまいかとも思ったほどだっ
た。

二時間以上も、結局、かたことまじりの通訳の人がは
いり、一週間くらい留置いりで、まずはきまり、シベリ
アの留置は此の世の終わりかと思われ、手足のこおるの
がわかった。そのような事情から、労働条件や作業器具
の改善、又は建物の改良等、逐次事情もわかってきたよ
うだった。が、なんといつても寒さと食べ物の量の少な
いこと、寝ていても食物がノドを通る音が聞こえるよう

な気になり、幾度となく目がさめて、その内の何度か、
さえわたる夜空の星を眺め、北斗七星の位置より逐次連
想をしながら寝て、そしてまた起きてと、まったく生活
の不安さもこの辺にあるようだった。

その一年半後に、従弟の一郎君の戦病死（戦死）をあ
の広いシベリアの一角で、今に思えば、どこの人かわか
らぬ人より、風呂の火をたきながら（白樺の木が燃料）
聞く。ゾットする思いでまったくまんじりともせず、一
夜を過ごした。

捕虜としてソ連に連行された

苦しみの思い出

東京都 常世田 千代松

シベリア鉄道の間駅に降車

敵しい行進の開始

牡丹江を出発した臨時軍用列車は、朝七時ごろシベリ
ア鉄道の間駅イスベストコーバヤに到着した。車両ご